

# 【研究ノート】長崎県南島原市<sup>にほんはぜ</sup>二本櫓遺跡出土の「島原半島系土器」

古門 雅高

## はじめに

筆者が初めて「島原半島系土器」を認識したのは、長崎県教育庁に入庁した今から30年ほど前のことである。現在の長崎歴史文化博物館の敷地内に当時、埋蔵文化財の整理を行うための建物があり、「立山（たてやま）分室」と呼ばれていた。分室の遺物収蔵室の窓際に、南島原市の辻貝塚から出土した脚台付の甕形土器片があった（以後、台付甕と呼称）。内彎する「く」字形の口縁を持ち、器壁は極めて薄く、胎土は淡いレンガ色で、見るからに華奢な土器であった。口縁端は肥厚やつまみあげが施され、弥生時代終末期の庄内式土器や古墳時代前期の布留式土器に見られるような口唇部の形状が印象に残った。初見で感じたのは「これは土師器ではないか？」という疑念と戸惑いであった。それから今日まで、この土器のことは常に頭の片隅にあった。その間、長崎県考古学会を中心に環有明海という視点からこの「島原半島系土器」の検討が精力的に行われ、徐々にその実態が明らかになってきた。

また最近では、南島原市の二本櫓（にほんはぜ）遺跡の竪穴建物跡から「島原半島系土器」の良好な一括資料が出土し、同市教育委員会より発掘調査報告書が刊行された（南島原市教委編2024）。

以上のような経過と現状を踏まえ、本稿では二本櫓遺跡出土土器を検討し、同遺跡出土土器が「島原半島系土器」に包括される一様式として認定できるかどうかを考察する。

なお、文中の敬称は略させていただいた。

## 1 「島原半島系土器」の研究史

### (1) 「島原半島系土器」の初出

長崎県考古学会は2011（平成23）年から2015（平成27）年にかけて台付甕と肥前型器台をテーマとした合同研究会を4回開催している（註1）。「島原半島系土器」という用語の初出はこの時の合同学会であり、学会の成果は各大会の資料集4冊に収められている。したがって「島原半島系土器」の研究史は、この4冊の資料集に凝縮されていると言っても過言ではない。本稿でもこの資料集をもとに同土器の学史を追っていく。各資料集からの引用にあたっては資料集の刊行年を明記し、いつの合同学会の資料集からの引用かが分かるようにした（註2）。

「島原半島系土器」の呼称を最初に用いたのは石橋新次であり、「2011年資料集」に同土器の特徴を次のように記している。「弥生後期後半に（島原半島：筆者註）地域独自の土器成立（甕・壺・高坏・器台）。甕は黒髪式土器をベースにした台付甕。壺、高坏は瀬戸内系土器の影響を受けたもので佐賀県武雄付近まで分布。土器は弥生終末期から古墳初頭期に活発に動く。（中略）広域的有明海交流ルートの出現。交流の実務を島原半島沿岸民が担う」（石橋2011 p16）。以上の石橋の定義にひとつだけ補足するとすれば、檀佳克が指摘するように島原半島系の台付甕の特徴のひとつに内彎する口縁を持つという点がある。「島原半島系土器」に限らず、九州の台付甕が肥後の黒髪式土器を祖型とするのは同資料集で福田匡朗も明らかにしており（福田2011b）、今日まで異論はないようである。しかしながら、「島原半島系土器」以外の九州の台付甕のほとんどは口縁部

が外反するか、直に開く型式である。もちろん島原半島から出土する台付甕にも外反するものや直に開くものは存在するが、時代が新しくなるにつれて内彎口縁の台付甕が主体となる。

#### (2) 「島原半島系土器」の分布

「2012年資料集」では「島原半島系土器」の分布が明らかとなった。石橋新次は前年の合同研究会で佐賀県武雄市の遺跡と熊本県天草市上木原

(かみきはら) 遺跡の「島原半島系土器」を紹介していたが、さらに具体的な資料を提供した。佐賀平野西側の白石(しろいし)平野を流れる六角川(ろっかくがわ)流域の茂手(もで)遺跡、小楠(おぐす)遺跡、小野原遺跡、みやこ遺跡、納手(のうて)遺跡などから「島原半島系土器」が出土していることを明らかにしたのである(石橋2012)。

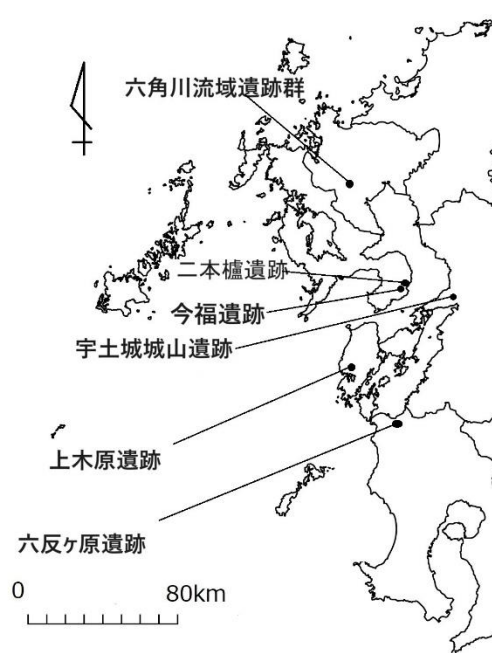
また、檀佳克は、熊本県の白川、緑川流域および天草の地域の中で島原半島系の台付甕が出土するのは熊本県宇土市宇土城山遺跡、同県熊本市神水遺跡、同県天草市上木原遺跡の3箇所であることと、南筑後や菊池川流域では未確認であることを明らかにした。さらに熊本・筑後の台付甕は基本的に口縁部が内彎しないため島原半島系の台付甕とは異なる外観であることを指摘した(檀2012)。

#### (3) 「島原半島系土器」の特徴

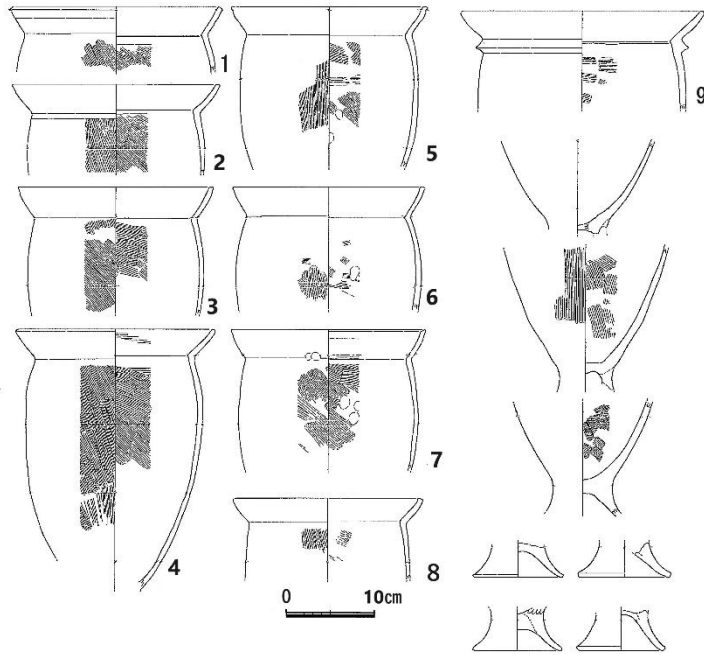
「2014年資料集」は合同学会がテーマを肥前型器台に絞って開催されたため、「島原半島系土器」の記述は少ないが、その中でも石橋新次が長崎県南島原市今福遺跡の土器を中心に「島原半島系土器」の特徴を掲載しているので引用する。「私の関心を引いたのが、その(今福遺跡:筆者註)出土土器の多様性であった。北部九州の須玖式系土器と中九州の黒髪式系土器との混在と、非九州系と考えられる楡描き平行線を多用する壺や短い頸部に摘みだされたような口唇の壺、椀形や浅い坏部に強く内側に屈折する口縁下に突帯をめぐらす高坏などが存在する状況である。明らかに須玖式や黒髪式など単系の土器で占められる北部九州や中九州とは異なっていることが窺われた。この様相が弥生時代中期～後期の島原半島の土器の在り方であり、その弥生後期後半～終末に出現するのが「肥前型器台」である」(石橋2014 p. 31, 32)。この石橋の記述は「島原半島系土器」の特徴を的確に言い当てている。

#### (4) 「島原半島系土器」の歴史的評価

「2015年資料集」は長崎県考古学会と九州考古学会との合同研究会であったため、九州各県の弥生時代後期の甕形土器と透かしをもつ器台がテーマとして設定された。そのため局所的な土器群である「島原半島系土器」の記述は少なくなっている。その中でも石橋新次は再び同土器をとりあげ、「島原半島系土器」が分布する佐賀県武雄地域と島原半島との歴史的関係を詳述している。「島原半島系土器」の歴史的背景を理解するうえで重要と思われるので、長くなるが引用する。「武雄

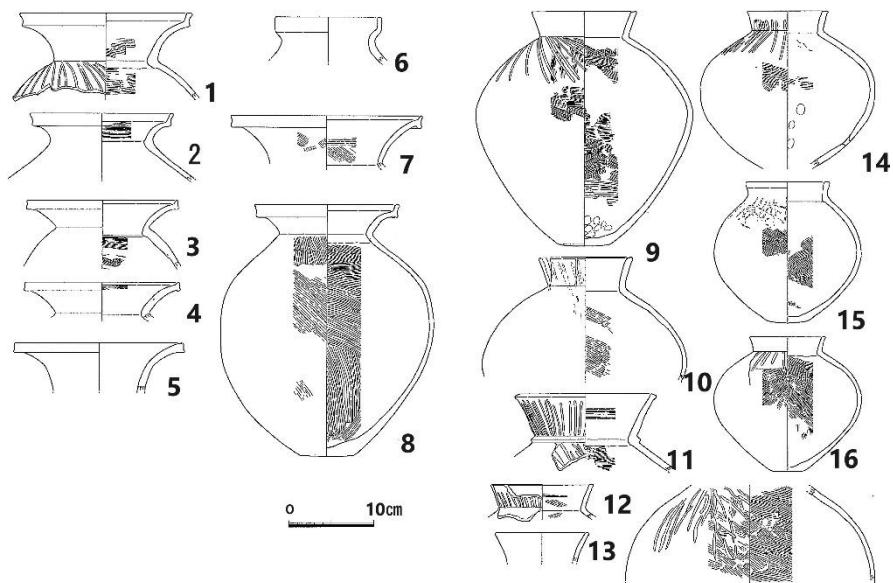


第1図 本稿関係遺跡位置図

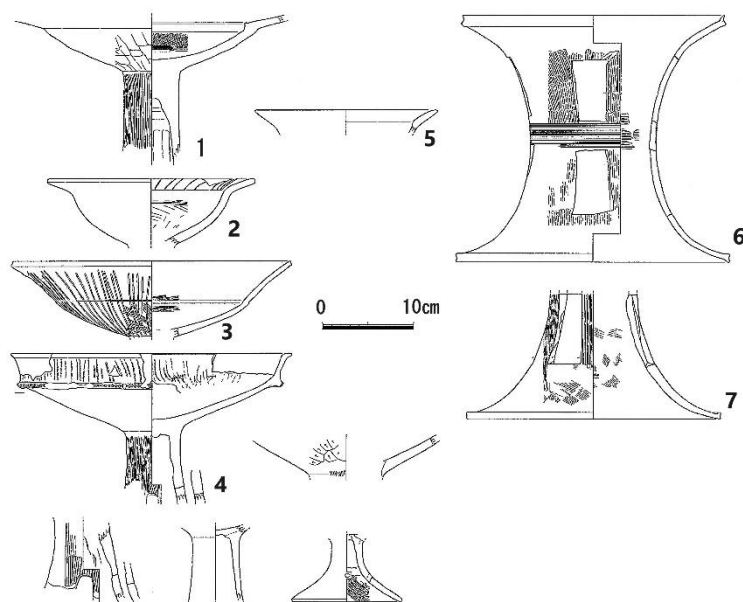


第2図 二本榑遺跡 第1号建物跡出土の台付甕 (S=1/9) (南島原市教委編 2024 より)

地域と島原半島の交流は弥生中期後半～末頃には始まっており、武雄地域に主体がある胴膨らみで多重突帯の甕が点々と景華園遺跡や富の原遺跡などから出土している。この時期の交流の方向は武雄地域→島原半島であり須玖式文化圏の拡大波及の流れとして捉えられる。この交流は弥生後期後半～終末期に再び活発化する。この時期武雄地域から島原半島系の甕、壺、高坏、「透かしのある器台」が出土する。特に武雄地域の台付甕は島原半島系の甕で占められ「透かしのある器台」も島



第3図 二本榑遺跡 第1号、2号竪穴建物跡出土の壺形土器 (S=1/9) No8のみ2号竪穴出土 (南島原市教委編 2024 より)



第4図 二本樋遺跡 第1号竪穴建物跡出土の高坏形土と肥前型器台 (S=1/9) (南島原市教委編 2024 より)

原半島に次いで多い。そこには島原半島→武雄地域方向の恒常的な交流の存在が窺われる」(石橋 2015 p. 32)。この後、石橋は透かしのある器台や直口縁広口壺の展開も併せた九州各地の弥生後期土器の動態から、弥生後期まで踏襲された須玖式土器文化圏の後退と新たな地域関係の成立を指摘し、この新たな地域関係の核が有明海沿岸部であったと評価した。

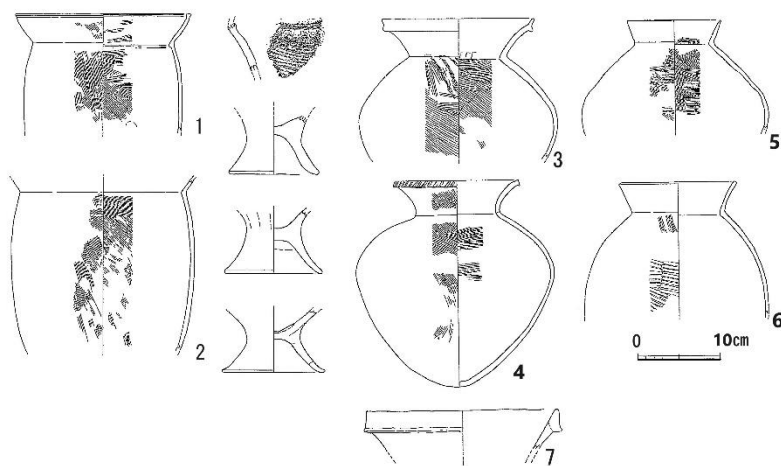
ここまで各年の合同研究会資料集をもとに「島原半島系土器」の学史を追ってきた。

当初は長崎県と熊本県の研究者が対面し検討したものの、同じ台付甕でありながら互いの土器の相違点が目につき、その違和感をなかなか克服できなかったと言われる。しかし九州という広い視点からの台付甕の検討を経て、互いの土器様相の認識と理解も深まり、最終的には、須玖式土器様式の後退と瀬戸内系土器様式の介在を受けた九州各地の弥生後期土器の様相が地域の独自性や自立性の表れであるという研究視点が定まり、さらにそれらの地域の相互の関係性をもたらしたのが有明海であったとの共通認識に至ったと言える。「島原半島系土器」もそのような弥生後期の時代背景のもとに誕生し、当時の

社会状況を物語る証言者として今、我々の眼前にあると言うべきであろう。

ここで、改めて「島原半島系土器」を整理する。

同土器はそもそも宮崎貴夫が本県本土部の台付甕と肥前型器台に着目し、石橋



第5図 上木原遺跡 S003 竪穴建物跡出土の台付甕と壺形土器 (S=1/9) (天草町教委編 2003 より)

新次が今福遺跡の弥生後期土器をきわめて特徴的な土器様式と認識したことから始まる。両氏は5年間にわたって4度開催された合同学会の議論を通して、同土器が今福遺跡を標式遺跡とする弥生後期後半から終末の島原半島独自の土器様式という認識に至っている。

## 2 「島原半島系土器」の一括資料

「島原半島系土器」は台付甕など特定の形式が広域に分布する特徴があり、竪穴建物跡などの遺構からまとも出土した例は極めて少ない。管見の限り長崎県南島原市今福（いまぶく）遺跡、同市二本櫓（にほんはぜ）

遺跡、熊本県天草市上木原（かみきはら）遺跡のそれぞれ竪穴建物跡と佐賀県武雄市の納手（のうて）遺跡の土坑から出土した資料くらいである。今福遺跡の竪穴建物跡（C9, 10区住居跡）から出土した土器群は二本櫓、上木原両遺跡の土器とほぼ同じ時期であるが、出土した形式や型式が少ないため、ここでは二本櫓、上木原両遺跡の土器を紹介しながら、「島原半島系土器」の概要を把握したい。

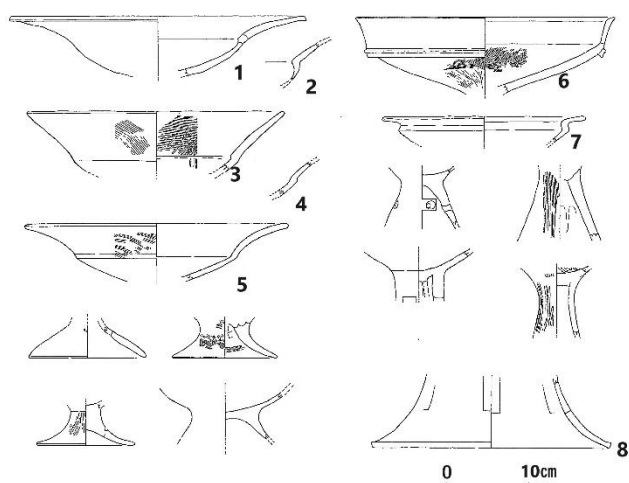
### （1）二本櫓遺跡出土の「島原半島系土器」（第2～4図）

二本櫓遺跡は長崎県南島原市の深江町に所在し、普賢岳東斜面のなだらかな火山性扇状地の海岸近くの標高約30m付近に位置する。自転車専用道路建設のための緊急発掘調査により2棟の竪穴建物跡を検出した。発掘担当者は竪穴建物跡（SI01）から多量に出土した土器群は、住居の廃絶にあたり廃棄したものと判断している。また住居廃絶に伴う祭儀に用いられた土器群とも認識しており、そういう意味では形式（器種）による偏在性も考慮しておく必要がある。

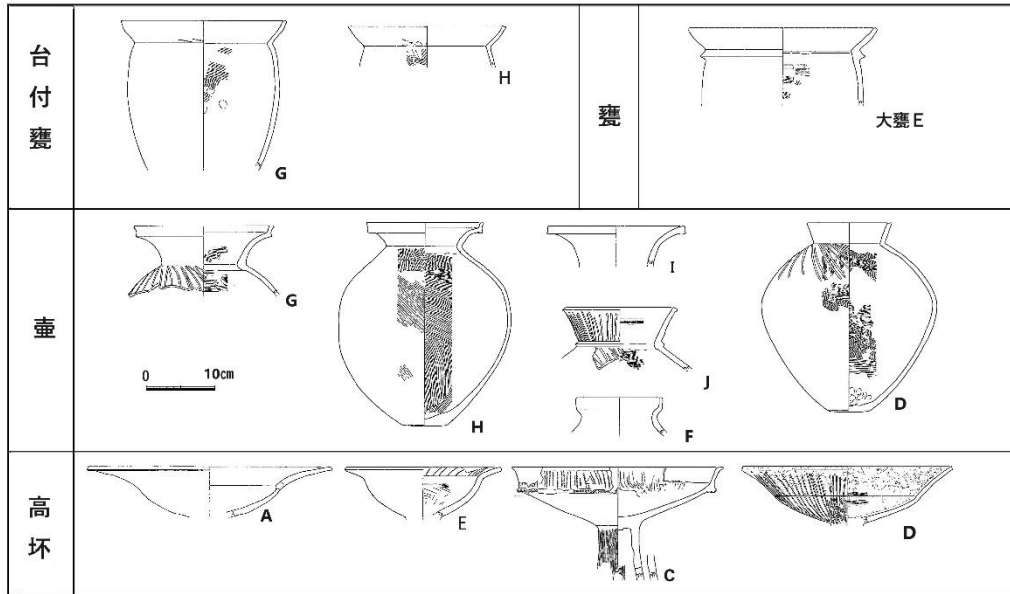
SI01から60m離れたもう1棟（SI02）からは刻目突帯文土器が共伴しており、報告書の記述によると建物跡本来の床面より下層からの出土であるという。幸い刻目突帯文土器以外は異なる時期の遺物の混入がないので、筆者は同遺跡のSI01とSI02出土土器は同時期で一括性が高い資料と判断した。

### （2）上木原遺跡出土の「島原半島系土器」（第5、6図）

熊本県天草市に所在する天草島の下島の南西に位置し、荒尾岳から南に延びる尾根上にある。標高約90mから96mの南向きの比較的標高の高い緩斜面に立地している。天草諸島は弥生時代の遺跡が少なく、同時代の遺構が調査されるのは本遺跡が初めてであった。竪穴建物跡3棟が検出されている。発掘調査報告書には遺物の出土状況の詳細が記述されていないので、同時期の一括遺物が判断が付きかねるが、後述するように二本櫓遺跡出土土器とほぼ同じセット関係の土器群であることから、同時期の遺物の可能性が高い。



第6図 上木原遺跡 S002, 003 竪穴建物跡出土の高坏土器と器台形土器 (S=1/9) 3, 4, 7, 8はS002出土 (天草町教委編2003より)



第7図 二本樋、上木原遺跡から出土した土器の型式分類 (縮尺任意)

### 3 二本樋、上木原遺跡出土土器の型式分類

ここからは二本樋遺跡と上木原遺跡出土土器の形式(器種)と型式を整理する。作業にあたっては宮崎貴夫が南島原市今福遺跡の発掘調査時に用いた分類を使用する(第18図)(宮崎1986)。

#### (1) 甕形土器

①台付甕G類(第2図1,4,7、第7,8図)とH類(第2図2,3,5,6,8、第5図1、第7、8図)

二本樋遺跡の主体を占める台付甕の特徴は、口縁部が内彎し、口径が胴部最大径より大きい形状をしている点である。肩が張らず、なで肩と形容しても良いほど胴部のふくらみが小さい。石橋が「島原半島型」と呼称した台付甕である。さらに口縁端部の成形によって2型式に分けることができる。口縁端部を若干内面に傾けて平坦に整え、口縁端部に成形を施さないものは台付甕G類である(第7図、8図)。後述する台付甕H類に先行する。一方、口縁端を外側へ肥厚させたり、内側へ肥厚させたり、口唇部中央をくぼませ、口縁部断面が「M」字状にするのものなど、なんらかの成形を施すものは台付甕H類(第7、8図)である。実見の結果、口唇部を摘み上げたものは確認できなかった。

②大甕E類(第2図9、第7図)

宮崎分類では口縁部が内彎し、頸部に突帯をもつものを大甕E類としている(本稿では未掲載)。大型品が多い傾向にある。

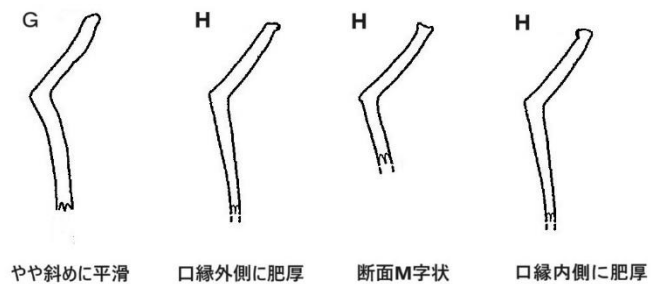
#### (2) 壺形土器

①壺G類(第3図1.2、第7図)

複合口縁の壺形土器である。「島原半島系土器」の壺形土器の典型である。

②壺H類(第3図7,8、第5図3、第7図)

南九州の弥生後期の土器様式である松木菌式土器や高付式土器の壺に



第8図 「島原半島系土器」の台付甕の口縁部断面模式

遺跡名／土器型式	台付甕			大甕E	壺						長頸袋状口縁壺	無頸	複合口縁壺 (下大甕系)	高坏					肥前型器台
	G	H	E		G	H	I	J	K	F				A	E	C	D	H	
二本櫛遺跡	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	○	○	○	○	—	○
上木原遺跡	○	○	○	—	—	○	○	○	—	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○

### 第9図 二本櫛、上木原遺跡から出土した土器型式のセット関係

見られる二又（にさ）状口縁に似た口縁部を持つ。しかし口縁内面にくぼみや屈曲があり、それらがない南九州の土器とは異なる。宮崎分類ではG3類である（本稿では未掲載）。

#### ③壺I類（第3図3～5、第5図4、第7図）

口縁端部を肥厚させ、さらに口唇部をくぼませて口縁部断面が「M」字状を呈する壺形土器である。実見により肥厚部分は粘土を貼り付けて成形していることが確認できた。宮崎分類にはない。

#### ④壺J類（第3図9, 10, 12～16、第5図5, 6、第7図）

短頸で直口縁の壺形土器である。近隣地域に類例がなく、瀬戸内系と思われる。宮崎分類にはない。

#### ⑤壺K類（第3図11、第7図）

壺J類の頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける壺形土器である。宮崎分類にはない。

#### ⑥壺F類（第3図6、第7図）

短頸の複合口縁壺である。「島原半島系土器」の典型である。

#### ⑦肥後型複合口縁壺（第5図7）

口縁部に断面三角形の突帯を貼り付ける疑似複合口縁をもつ壺形土器である。肥後型複合口縁壺と称されている（天草町教委編2003、西山2014）。熊本県の白川・緑川沿岸地域で盛行するが、県北の菊池川流域には及んでいない。二本櫛遺跡での出土はなく、上木原遺跡に見られる。

### (3) 高坏形土器

#### ①高坏A類（第4図1、第6図1, 2、第7図）

鋤先状の口縁部をもつ。弥生中期の須玖式土器の高坏の系譜を引く（註3）。

#### ②高坏E類（第4図2、5、第7図）

口縁部が外反し、坏部が深い低脚高坏である。高坏A類からの分離型式と考える。

#### ③高坏C（第4図4、第6図6、第7図）

口縁部が立ち上がり、口縁部と坏身の境目の外面に突帯を持つ。北部九州の高三潴式土器の系譜で、もともと瀬戸内地方の影響を受けて成立したとみられる。外面の口縁部と坏部の境界に突帯を持つのは「島原半島系土器」の高坏形土器の典型である。

#### ④高坏D類（第4図3、第6図3～5、第7図）

坏部外面に稜を持つ北部九州の西新式土器系の高坏形土器である。口縁端から坏の屈曲部までの距離と屈曲部から坏と脚の境までの距離がほぼ等しく、高さもほぼ等しいところから蒲原編年の惣座2式に該当すると考える（蒲原1991）。

#### ⑤高坏H類（第6図7）

口縁部断面がS字状を呈する高坏形土器である。二本櫛遺跡では出土せず、上木原遺跡に見られる。肥後の菊池川流域に展開する野部田式土器、西久保式土器の系譜の高坏と見られる（福田2011a）（註4）。宮崎分類にはない。

### (4) 器台

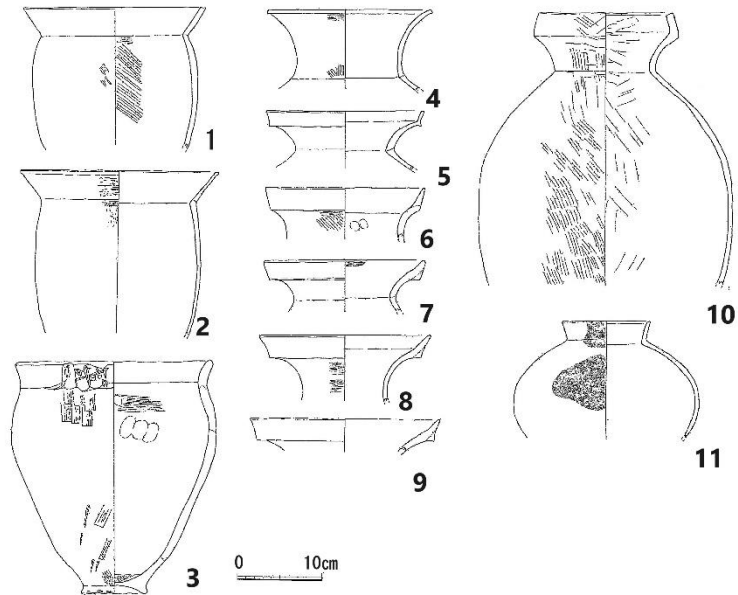
肥前型器台である（第4図6, 7、第6図8）。



以上のことから二本櫛、上木原両遺跡に見られる土器のセットが、特定の時期に島原半島南部を中心に存在したことを示すと考える。

## 6 二本櫛式土器の設定

以上の検討の結果、二本櫛、上木原両遺跡で見られた土器のセット関係は、南島原で同時期に一定期間用いられた土器群であることが確実となり、土器様式として設定することが可能となった。通常、様式名はその遺跡が所在する地名が冠されるので、本様式もそれを踏襲し、「二本櫛式土器」と呼ぶ。ただし、2時期に渡る土器群の可能性があり、将来に細分の余地を残す。



第12図 六反ヶ丸遺跡 竪穴建物跡1号出土の土器 (S=1/9)  
(公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編 2022 より)

## 7 台付甕H類の分布

前述のように二本櫛式土器は主に島原半島南部で、弥生時代後期終末に存

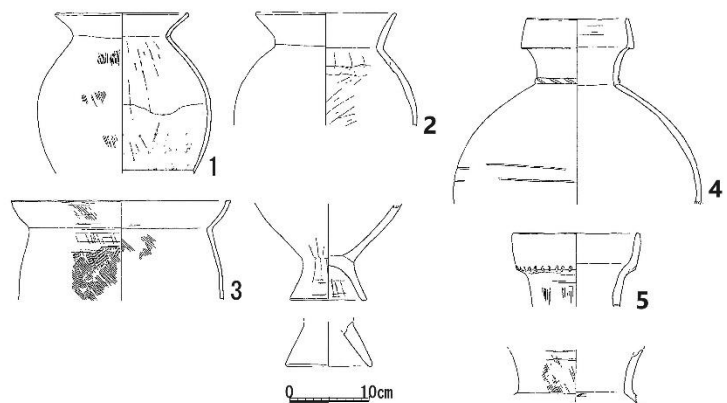
在した土器様式であった。同様式を構成する一部の型式は、広域に分布しており、特に口縁部が内彎する台付甕の分布は広く、各地で「島原半島系土器」を認識するうえでの手掛かりとなっている。

この二本櫛式土器の台付甕のうち同H類を出土して注目される遺跡として鹿児島県出水市六反ヶ丸(ろくたんがまる)遺跡(第1図)があげられる。

(1) 鹿児島県出水市六反ヶ丸(ろくたんがまる)遺跡の台付甕H類

遺跡がある出水市は鹿児島県の北西部にあり、北薩地方に属す。八代海(不知火海)に面し、隣は熊本県水俣市である。六反ヶ丸遺跡は出水平野を流れる米ノ津川の右岸の河口近くの標高約6mの河岸段丘上に立地する。南九州西回り自動車道(芦北出水道路)の建設事業に伴って緊急発掘調査が行われた。

竪穴建物跡1号と土器溜4、同5



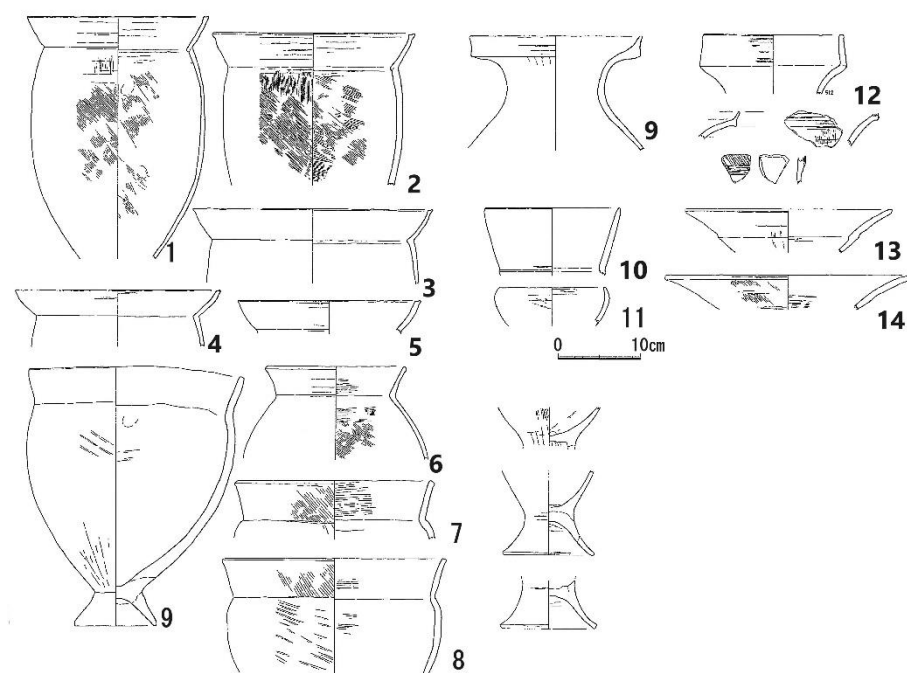
第13図 六反ヶ丸遺跡 土器溜4出土の土器 (S=1/9)  
(公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編 2022 より)

から、いずれも口縁端部に成形を施す二本櫛式土器の台付甕H類が出土した（第12図1,2、第13図3、第14図1~4）。

① 竪穴建物跡1号（第12図） 同遺跡A地点で発見された竪穴建物跡は3.2メートル×3.4メートルの楕円形のプランを持つ。同遺跡の総括的報告書では台付甕H類（第12図1,2）と共伴した在地系の甕型土器（第12図3）は成川式土器のうち中津野式土器段階の古相であるという（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編2022）。

② 土器溜5（第14図）

同遺跡C地点で発見された1.3メートル×1.5メートル×0.23メートルの土器溜である。二本櫛式土器の台付甕H類（第14図1~4）と共伴した在地系土器は成川式土器の中津野式土器段階の古相の土器であるという（第14図9）（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編 前掲）



第14図 六反ヶ丸遺跡 土器溜5出土の土器 (S=1/9)  
 (公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編2022より)

③ 土器溜4（第13図）

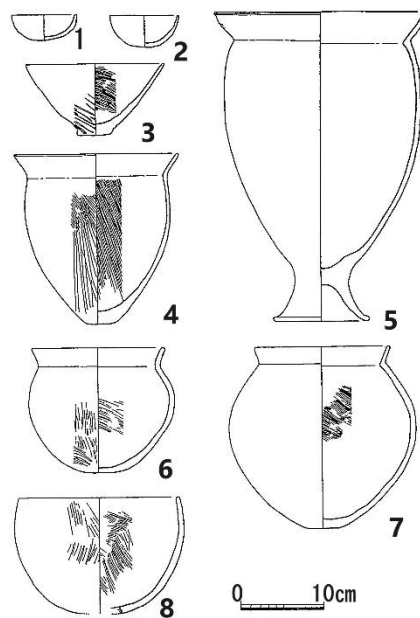
同遺跡C地点で発見された。台付甕H類（第13図3）と共伴した外来系の丸底の甕は成川式土器の中津野式土器段階の新相とされている（第13図1,2）（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編 前掲）。

## 8 台付甕H類の時期

以上のように二本櫛式土器の台付甕H類は鹿児島県出水市六反ヶ丸遺跡の竪穴建物跡1号、土器溜4、同5で在地の成川式土器の中津野式土器段階と共伴していることから、中津野式土器の相対年代を知ることにより、台付甕H類の時期が想定できる。近年、久住猛雄の型式学的検討により中津野式土器は「北部九州の「II A期～II B期」（久住1999）に概ね併行し、畿内では「布留0式」の

古相～新相、布留1式初頭に併行するだろう。」とされ、同土器の帰属時期に一石を投じている(久住 2015 p. 68)。このことを受けて橋本達也は「中津野式土器は従来いわれてきた弥生時代終末期よりも、古墳時代前期を主体とする時期に」とらえられるとした(橋本 2015 p. 101)。

また松崎大嗣は中津野I式を久住編年II A期、中津野II式は同II B期に位置付けている(松崎 2021)。したがって現状では、中津野式土器は古相の土器がおおよそ久住編年II Aと併行し、新相の土器が同II B併行と考えられ、ほぼ布留0式から1式初頭併行と認識できる。したがって台付甕H類は、中津野式土器との共伴から、古墳時代初頭から前期前葉の土器型式ということになる。さらに二本櫃式土器の時期は弥生時代終末の惣座1式から同2式併行であるため、台付甕H類の存続時期は今のところ弥生時代終末から古墳時代前期前葉となる。



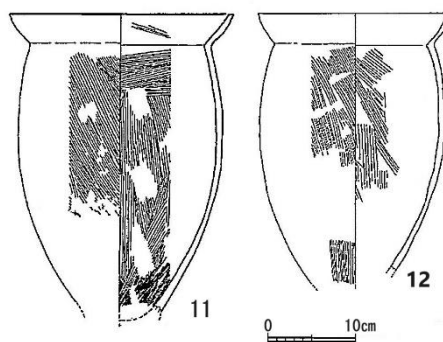
第15図 納手遺跡 SK403 出土土器(S=1/9)  
(武雄市教委編 1986 より)

## 9 「島原半島系土器」の分布

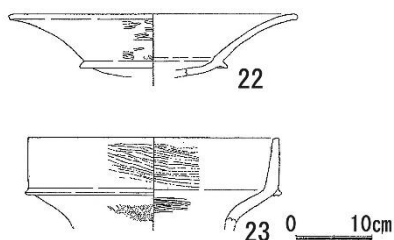
前述の六反ヶ丸遺跡では竪穴建物跡や土器溜などの遺構から出土した「島原半島系土器」を検討したが、ここからはその他の県外資料を見ていくことにする。

(1) 六角川流域の遺跡から出土した「島原半島系土器」(第15図)

佐賀県武雄市を流れる六角川流域には前述のようにみやこ遺跡、小楠遺跡、茂手遺跡、納手遺跡など「島原半島系土器」を出土した遺跡が集中する。いずれも後世の削平により遺構の遺り具合が悪いが、中でも納手遺跡 SK403 からは台付甕H類(第15図5)と共伴した一括遺物が見られる。第15図6、7は蒲原編年の壺D類



第16図 宇土城跡城山遺跡出土土器(S=1/9)  
(西山 2014 より)



第17図 佐賀県唐津市中原遺跡の  
「島原半島系土器」  
S=1/9 (小松 2013)

で、筆者は底部形状から判断し

て惣座2式(弥生後期終末)と判断した(蒲原 1991、同 2021)。

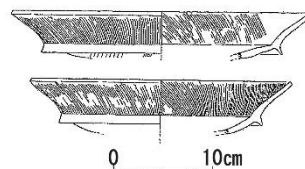
(2) 熊本県宇土城跡城山遺跡から出土した「島原半島系土器」(第16図)

宇土城本丸のトレンチ調査において出土している。口唇部に成形を施さない台付甕G類が2個体、地元の土器と共伴している。在地の土器は西山由美子によると弥生時代後期後半から終末の時期であるという(西山 2014)。檀佳克も同様の年代観を

示している（檀 2015）。

（3）佐賀県唐津市中原（なかばる）遺跡の「島原半島系土器」（第 17 図）

小松 譲は佐賀県唐津市中原（なかばる）遺跡から出土した土器群の中に、肥後系・島原半島系土器が含まれていたことを報告している（第 17 図）（小松 2013）。「22 は高杯、23 は二重口縁壺である。22 は杯部上半と下半の境に、23 は二次口縁基部外面に断面方形の突帯を回す。このような部位に突帯を回す土器は在地土器には見られない。」と報告している（小松 2013 p. 467）。高杯 22 は長崎県雲仙市の龍王遺跡で発見された豪族居館跡の周溝より出土した高杯に似る（第 18 図）。壺の 23 は上木原遺跡調査 2 区遺構外出土遺物に類似する。



第 18 図 長崎県雲仙市龍王遺跡の土器 S-1/9（雲仙市教委編 2008 より）

## 9 二本櫛式土器の課題

以上、ここまで二本櫛遺跡を標式遺跡として同遺跡から出土したセット関係にある土器群は同一の期間に一定の範囲で分布しているため「二本櫛式土器」の様式名を提唱したが、様式として若干の課題があるので、最後に列記しておく。

### （1）高坏形土器に古い型式のものが多数遺る問題

二本櫛式土器の高坏形土器として 4 型式あるが、本来であれば一部重複しながら高坏 A・B 類→同 C 類→同 D 類という変遷をたどり、旧型式は新型式に取って代わられるものだが、旧型式のものが消滅せずに多く遺っている点が極めて特異であり、この点をいかに理解するかという課題がある。

### （2）日常使いの土器群ではない可能性がある問題

一般的には土器の様式は日用品（日常使い）としての土器群で成立するが、二本櫛遺跡出土の土器群は祭儀後の廃棄の可能性がある点に注意が必要である。さらに二本櫛式土器と同じセット関係の土器群を出土した上木原遺跡の竪穴建物跡は弥生時代の遺跡がほとんど知られていない水草にあって、標高 90 ㍎に立地するという点で、その竪穴建物跡は日常の生活の場であったかのかという疑問が生じる。さらに、二本櫛式土器は六角川流域の諸遺跡に比較して高坏形土器が多い傾向も看守できる。現状では二本櫛式土器が非日常的土器群であると断定はできないが、留意すべき点である。

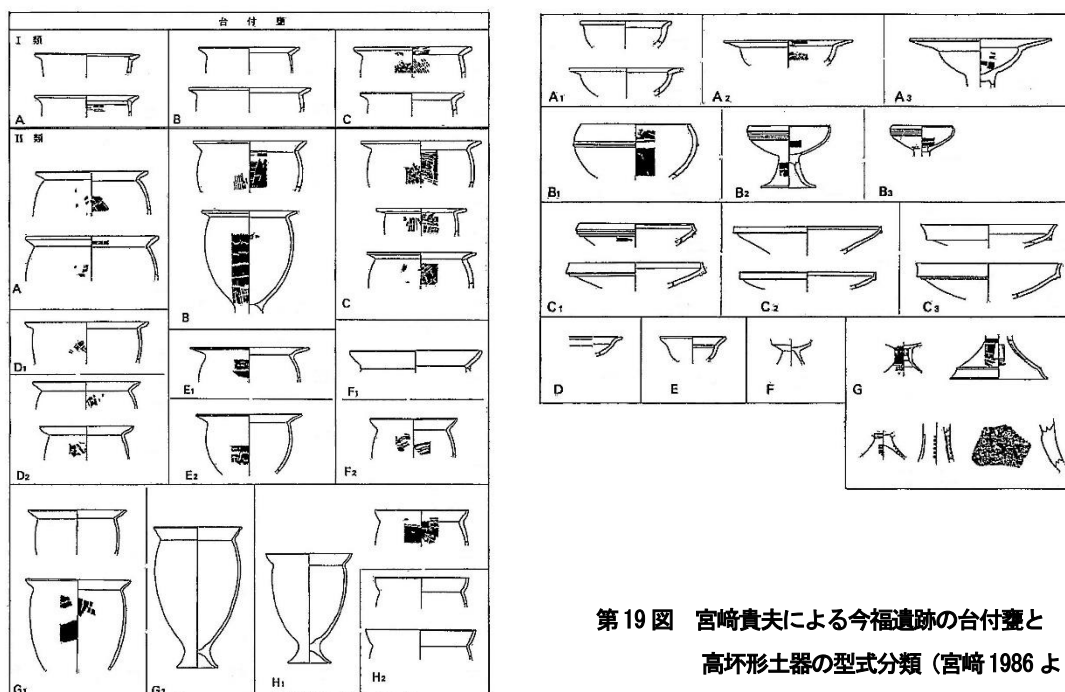
南島原の弥生時代後期から古墳時代前期の人々は貝塚を多く遺しており、漁労などを生業としていた可能性が高い。とすれば、彼らの日常生活の場は海であり、陸上は非日常の場であったことが推定される。彼らが船上生活者であったとする考古学的証拠はないが、当地における竪穴建物跡の稀少性や立地の特異性は、そのことを反映している可能性があると筆者は考えている。とすれば当地の海民や海人は土器様式においても河川流域や沖積平野に展開された社会とは異なる土器様式を持っていた可能性を指摘しておきたい（註 7）。

## 11 まとめ

本稿では、二本櫛遺跡と上木原遺跡の出土土器の検討を行い、「二本櫛式土器」として様式設定した。あわせて隣接地域の土器との比較検討を行い、同様式の特徴と時期を推定した。その結果、二本櫛式土器は弥生時代後期終末の土器様式と結論付けた。

また、「島原半島系土器」を代表する型式のひとつである台付甕 H 類は広範囲に分布し、その時期は弥生後期終末から古墳時代前期前葉であることを明らかにした。

さらに二本櫛式土器は海民ないし海人の土器様式ではないかとの問題提起も行った。本稿では「島原半島系土器」のうち弥生時代後期終末の「二本櫛式土器」を取り上げたが、「島原半島系土器」は弥生時代後期後半を通じて島原半島に展開する極めて個性的な土器群で、本県本土部の他地域にも及んでいる。今後も当該期の各時期における土器の様相や変遷を明らかにすることによって、「島原半島系土器」を携えた人々の生活や社会、他地域に与えた影響などを明らかにしていきたい。



第19図 宮崎貴夫による今福遺跡の台付甕と高坏形土器の型式分類(宮崎1986より)分類(宮崎1986)

本稿を執筆するにあたり、竹田ゆかり、堂込秀人、野澤哲朗、宮崎貴夫、渡邊康行の各氏には大変お世話になった。

また南島原市教育委員会文化財課の本多和典氏には二本櫛遺跡出土土器の実見の機会をいただいた。末筆ながら芳名を記し、感謝申し上げる

#### 【註】

註1 地方の考古学会が短期間に4回も合同学会を開くことは稀有なことであり、当時の関係者の熱意と実行力には敬服せざるを得ない。以下に各合同研究会の開催日時とテーマを列記する。

2011(平成23)年12月3日・4日 肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会「環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—」会場は熊本市立熊本博物館

2012(平成24)年11月17日・18日 長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会「有明海をめぐる弥生時代集落と交流」会場は長崎県雲仙市国見町文化会館「Mahoroba」

2014(平成26)年12月13日・14日 肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会「肥前型器台について」会場は熊本県宇土市立図書館郷土資料室

2015(平成27)年7月11日・12日 長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会「有明海とその周辺をめぐる弥

- 註2** 長崎県考古学会事務局の野澤哲朗氏によると、4冊の資料集は既に完売しているという。
- 註3** 筆者が驚くのは、古墳時代前期まで須玖式土器の系譜を引く、高坏A類が残存することである。このことを宮崎貴夫は早くから指摘していた。ちなみに佐賀平野では蒲原編年の村徳永3式（弥生後期前半）まで継続するが、後期後半には消滅する（蒲原2003）。また、二本櫛式土器の高坏形土器は、今福遺跡で宮崎が分類した型式がほぼ出土している。同遺跡の高坏形土器型式の対照は以下のとおりである（第19図参照）
- ・今福遺跡高坏A類＝二本櫛式土器の高坏A類
  - ・今福遺跡高坏B類＝二本櫛、上木原遺跡には存在しない。瀬戸内地方特に伊予（愛媛県）地方の高坏の系譜を引く。これに伴う甕型土器は辻貝塚1991年の1次調査の資料である。後期初頭から前葉の時期と思われる。
  - ・今福遺跡高坏C類＝二本櫛式土器でも高坏C類である。
  - ・今福遺跡高坏D類＝二本櫛式土器でも高坏D類である。
  - ・今福遺跡高坏E類＝二本櫛式土器の高坏B類である。A類からの分離型式と見ている。
- 註4** 今福遺跡や二本櫛遺跡、さらに南島原市内の貝塚遺跡でも肥後の弥生後期後半のS字状口縁の高坏形土器が出土しない。本稿では高坏H類として分類したものである。菊池川流域に近い島原半島北部でも管見の限り出土が無い。島原半島の人々の高坏形土器へのこだわりが感じられる。
- 註5** 宮崎貴夫氏よりご教示をいただいた。なお上木原遺跡の出土土器の中にも凸レンズ状の底部が見られる。
- 註6** 高坏D類が出土していないが、当地での初現が二本櫛、上木原遺跡の時期に極めて近いことが原因であると推定している。
- 註7** 佐賀県武雄市の六角川（ろっかくがわ）流域に「島原半島系土器」が出土する遺跡が存在することについて、石橋新次や宮崎貴夫は同地域が有明海という内海の物資流通の中継地であったと考えている。その物流を担ったのが「島原半島系土器」を携えた海人であったという評価である。筆者にはその評価の是非を判断する力はないが、季節的であったとしても同海人が六角川流域にも居住していた考古学的事実は非常に興味深い。

#### 【引用・参考文献】

- 天草町教委編 2003 『上木原遺跡』天草町文化財調査報告 第1集 天草町教育委員会  
県営羊角湾周辺地区中山間地域総合整備事業（木原工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査
- 石橋新次 2011 「有明海を巡る地域間交流」佐賀県地域を軸に『環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—』肥後考古学会・長崎県考古学会資料集
- 石橋新次 2012 「六角川流域の弥生時代集落」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会資料集
- 石橋新次 2014 「佐賀県における肥前型器台」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会 合同大会資料集
- 石橋新次 2015 「佐賀県における台付甕と透かしをもつ装飾器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会資料集
- 雲仙市教編 2008 『龍王遺跡Ⅲ』国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査 縄文時代・古墳時代篇 雲仙市文化財調査報告書第3集 雲仙市教育委員会
- 蒲原宏行 1991 「古墳時代初頭前後の土器様相—佐賀平野の場合—」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』16 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館  
後に『弥生・古墳時代論叢』所収 六一書房 2019

- 蒲原 宏行 2003 「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』27 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館  
後に『弥生・古墳時代論叢』所収 六一書房 2019
- 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会  
久住猛雄 2015 「「土師器」の中の「成川式」土器—中津野式から辻堂原式にかけて—」『成川式土器ってなんだ?—鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器—』: 鹿児島大学総合研究博物館
- 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編 2022 『六反ヶ丸遺跡3 -C・D地点-』南九州西回り自動車道(芦北出水道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 第42集
- 小松 譲 2013 「2, 唐津地域出土の肥後系・島原半島系土器群」『中原遺跡』VII (第一分冊) 11区~13区の集落跡の調査 西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書 佐賀県教育委員会
- 武雄市教委編 1986 『みやこ遺跡』六角川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書上巻 武雄市文化財調査報告書 第15集 武雄市教育委員会
- 武雄市教委編 1986 『茂手遺跡』六角川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書下巻 武雄市文化財調査報告書 第15集 武雄市教育委員会
- 武雄市教委編 1986 「納手遺跡」『茂手遺跡』六角川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書下巻所収 武雄市教育委員会
- 武雄市教委編 1991 『小楠遺跡』武雄市土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 武雄市文化財調査報告書 第26集 武雄市教育委員会
- 檀 佳克 2011 「土師器の編年①九州」『古墳時代の考古学1』古墳時代史の枠組み (株)同成社
- 檀 佳克 2012 「南筑後肥後地域と島原半島の交流」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会資料集
- 檀 佳克 2015 「甕型土器と器台からみた熊本と周辺地域との交流」『有明海とその周辺めぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会資料 長崎県考古学会・九州考古学会資料集
- 長崎県考古学会・九州考古学会編 2015 『有明海とその周辺めぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会資料 長崎県考古学会・九州考古学会
- 西山由美子 2014 「熊本県南部沿岸地域の器台について」『肥前型器台について』肥後考古学会肥後考古学会・長崎県考古学会資料集
- 橋本達也 2015 「成川式土器と鹿児島県の古墳時代研究」『成川式土器ってなんだ?—鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器—』: 鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也編 2015 『成川式土器ってなんだ?—鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器—』: 鹿児島大学総合研究博物館
- 肥後考古学会・長崎県考古学会編 2011 『環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—』肥後考古学会・長崎県考古学会
- 肥後考古学会・長崎県考古学会編 2012 『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』肥後考古学会・長崎県考古学会
- 肥後考古学会・長崎県考古学会編 2014 『肥前型器台について』肥後考古学会肥後考古学会・長崎県考古学会
- 福田匡朗 2011 a 「菊池川流域における古墳時代初頭前後の土器編年」『熊本古墳研究』第4号 熊本古墳研究会
- 福田匡朗 2011 b 「中九州における台付甕の盛衰—他地域との交流を視野に入れて—」『環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—』肥後考古学会・長崎県考古学会

松崎大嗣 2021 「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学研究』第 18 卷

南島原市教委編 2024 『二本櫛遺跡—市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査—』南島原市文化財調査報告書  
第 37 集 南島原市教育委員会

宮崎貴夫 1986 「Ⅱ弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅲ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化  
財調査報告書 長崎県文化財調査報告書第 84 集 長崎県教育委員会

#### 【第 10 図 参考文献】

- 1 長崎県教委編 1984 『今福遺跡Ⅰ』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 長崎県文化財調査報告書第 68 集 長崎県教育委員会
- 2 加津佐町教委編 1991 『辻貝塚Ⅰ』加津佐町文化財調査報告書 第 1 集 加津佐町教育委員会
- 3 南島原市教委編 2023 『内野貝塚』市道新田内野線道路改良事業に伴う発掘調査 南島原市文化財調査報告書第 31 集 南島原市教育委員会
- 4 松藤和人編 1975 『口之津貝塚(旧称三軒屋貝塚)及び口之津烽火(のろし) 遺跡調査報告』百人委員会埋蔵文化財報告 5 百人委員会
- 5 加津佐町教委編 1998 『辻貝塚Ⅱ』加津佐町文化財調査報告書 第 2 集 加津佐町教育委員会
- 6 南島原市教委編 2021 『内野貝塚』市道新田内野線道路改良事業に伴う発掘調査 南島原市文化財調査報告書第 23 集
- 7 南島原市教委編 2018 『浦田遺跡』南島原市文化財調査報告書 第 15 集 南島原市教育委員会

令和 6 年 8 月 10 日 (土) 脱稿